

団長の心のものさし

合唱団「あるも」
演奏会を聴く

大作・難曲に取り組み姿勢に感服

19日、富山市民プラザアンサンブルホールにおいて、合唱団「あるも」第13回演奏会が開かれた。うたおにからは内海、前川、町田、太田、小柴知之、コーロ・Guiからは山田さん、そして僕の計7人で押しかけた。会場は例年以上の聴衆で、熱演に耳を傾けていた。

あるもとうたおにとの関係は、そもそもあるもの益山団長が僕の実兄であることをきっかけに始まり、ジョイントコンサートを通じて15年ほどの付き合いになる。富山と三重、けっして近くはない距離だが、これまで

に6回(7公演)の合同演奏会を開催している。

この日の第1ステージは、ピツェッティ「2つの合唱曲」。うたおにでも何度か取り上げた作品だ。僕の記憶では、あるもも過去に演奏しているはずだ。手馴れた感じで落ち着いたものがある演奏だが、半面、テキストの持つ大胆さや妖艶さを表現しきれていないのが残念だ。続く第2ステージは、三善晃「五つの願い」で、この作品もうたおには第25回音楽会で取り上げている。アカペラ作品の持つ音の世界が上手く表現されていて、

なかなかの好演だ。今回のプログラムの中で、最もあるものにフィットした作品であったように思う。

最終ステージでは、荻久保和明の「縄文」が演奏された。この作品はかなりの大作であり難曲だ。まずはこうした作品を取り上げる姿勢を

評価したい。あるもほどのキャリア、実力がある合唱団は、合唱音楽の発展に十分貢献できるし、またそうであって欲しい。今の客層のニーズに応えるだけでなく、科学者が私たちにとっては理解不能な研究を続け、結果として私たちの日常生活に大きく役立つ成果を挙げるように、何年も経てば、必ず今日の演奏があったからと賞賛されるはずだ。勇気を持って取り組んで欲しい。演奏は決して精緻なものではないが、あるものメンバーが感じているほど、未消化には聴こえない。これは不安感からくるある種の緊張感が効果的に働いているからだろう。演奏に必要な集中力が程よく効いている、そんな音楽だ。そういう意味で、前半の2つのステージ以上に聴き応えがあった。

演奏の出来不出来より何を伝えたいのかが大事

とにかく私たち演奏者は、演奏の出来不出来に一喜一憂するものだ。もちろん、それが結果として表現できているか否か、強いては伝わる伝わらないという問題に終結する。しかし、演奏者の「思い」は作品に対する最大の愛情だと感じている。そうした愛情を感じる演奏が少ないことが残念である。思いがあり、それが作品への愛情へと変わる。愛情が実を結ぶために努力をする。つまり練習をするというわけだ。

今回のあるもの演奏会、なるほどなかなか聴衆にうける内容ではないだろう。しかし、聴く側にも「それなりの」愛情や努力は必要だろう。要は、与える側が誠意を持って活動を継続するしかないのである。媚びない活動をするしかないのだ。

実は、難曲には、その作品にしか伝えることの出来ない未知の世界、魅力が潜んでいる。愛情をたくさん注がない限り成就することのない作品の力があるのだ。だから「歌う」のである。

うたおにが9月に開く音楽会のテーマ「祈り」に通じる、あるものが奏でた「願い」だ。あるものこの姿勢を、仲間であるうたおには、必ず進化、発展させなければ、日頃コラボしている意味はないのだ。



熱演する合唱団「あるも」のメンバー

うたおにの6月17日(木)の様子

練習内容

Agnus Dei
TO THE MOTHERS IN BRAZIL
Ave maris stella

僕が欠席のため、男女に分かれてパート練習。それぞれの事情に合わせて作品をチョイスしての練習。

新人さんが多数入ってきたので、こうした練習も有効かな？合唱団の練習はアンサンブル中心だとは思いますが、少々矛先を変えてみるのもいいかも。いつも同じことの繰り返しもね…。たえずplan-do-seeの姿勢が必要だ。